

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳批評

- 翻訳は面白い 小尾芙佐訳『アルジャーノンに花束を』
翻訳は面白い。小尾芙佐訳の『アルジャーノンに花束を』を読むと、そう実感できるだろう。そのうえ、知能とは何か、学ぶとはどういうことなのかを考えさせてくれる物語でもある。この本が長年にわたって版を重ねているのは偶然ではない。

翻訳とは何か

- 翻訳についての一般的な誤解
音が並んでも音楽にはならない。言葉が並んでも文章にはならない。文章とは何よりも意味を伝えるものだ。翻訳の場合には原著がある。原著を読んで頭のなかで形作られる物語や論理を、母語で読者に伝えるのが翻訳である。物語や論理を伝えないものは、意味を伝えないものは翻訳ではない。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳は面白い

小尾芙佐訳『アルジャーノンに花束を』

自分の知能指数(IQ)を覚えている人がはたしてどれだけいるだろうか。周囲の人たちに聞いてみたが、だれも知らない。IQ のテストを受けた記憶すらない人が大部分だ。ただしこれは日本での話で、どうやらアメリカ人は違うようだ。日本人が血液型にこだわるのと同じぐらいに、いやそれ以上に知能指数にこだわる。子供のころに受けたテストのほのかな記憶に頼っているなら、あんなもので知能がわかると考えるのは、血液型で性格がわかると考えるのと変わらないほどお笑い種ではないだろうか。

それはともかく、アメリカ人が書いたものには知能指数の話がよくでてくる。そのなかで、翻訳という観点で飛びきり面白いのが、ダニエル・キース著『アルジャーノンに花束を』だろう。知能指数が 70 以下の主人公、チャーリーが手術を受けて短期間に天才になり、そして短期間にもとに戻る SF 物語だ。この物語を、主人公の「経過報告」の形で描いている。

翻訳という観点でこれが飛びきり面白いのは、主人公が使う言葉が変わっていくからだ。たとえば手術前の冒頭部分はこうなっている。

progris riport 1 march 3
Dr Strauss says I shoud rite down what I think and remembir and every thing that happins to me from now on.

けえかほおこく 1 - 3 がつ 3 日
ストラウスはかせわぼくが考えたことや思いだしたことやこれからぼくのまわりでおこたことわぜんぶかいておきなさいといった。

スベル・チェッカーが悲鳴をあげそうな文章、幼稚な文章と思えるが、原文をよく読むと間違いだらけというわけではない。ただ、耳で聞いた通り、話す通りに書かれた文章だ。そして、訳文はまさにそうなっている。耳で聞いた通りに、話す通りに、大部分を仮名で表記し、ごく少数の漢字をまぜる。

これを出発点に、主人公が手術を受け、知能指数が飛躍し、学習を進めるとともに、文章は正確になり、

複雑になり、語彙が増え、やがて、学者風の話し方や書き方をするようになる。訳文もその過程を忠実に再現する。読点などの符号を使うようになり、漢字が増え、語彙が増え、やがて学者風の文章になる。

たとえば「経過報告 13」の 6 月 10 日の項に、翻訳という観点から二重に面白い挿話がある。訳文をあげておこう。

「ヒンズー語も日本語も読めない？ そんな、まさか」
「チャーリー、きみのような語学的才能をだれもがそなえているわけじゃないんだ」
「じゃあ、この方法に関するラハジャマティの反論や、この種のコントロールの妥当性に対するタニダの挑戦を、彼はどうやって論駁できるんですか？ 彼はそれらについて知っているはず----」
「いいや.....」とストラウスは考え込むように言った。「その論文は最近のものだろう。翻訳させるひまがなかったんだ」

手術を受けてわずか 3 か月のチャーリーは翻訳の役割を知らない。教授がヒンズー語も日本語もロシア語も中国語も古代東洋語も読めないことを知り、肝をつぶす。チャーリーにはまだまだ学ぶことがあったのだ。

だが、学ぶ時間はあまりなかった。知能が急速にもとに戻っていく。最後の「十一がつ 21 日」の項はこう終わる。

P.S. please if you get a chanse put some flowrs on Algermons grave in the bak yard.

ついしん。どーかついでがあつたらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやてください。

翻訳は面白い。小尾芙佐訳の『アルジャーノンに花束を』を読むと、そう実感できるだろう。そのうえ、知能とは何か、学ぶとはどういうことなのかを考えさせてくれる物語でもある。この本が長年にわたって版を重ねているのは偶然ではない。

翻訳についての一般的な誤解

中学生か高校生のころ、雑誌か何かで「孤島で暮らすときに持っていきたい1冊の本」の特集があり、だれかがベートーベンが晩年に書いた四重奏曲の楽譜と答えていたのを読み、不思議な人がいるものだと思ったことがある。楽器がなければ何の役にもたたないじゃないかと思ったのだ。楽譜に使われている記号が何を意味するかぐらいは音楽の時間に学んでいたから、書かれている通りにたとえばピアノの鍵盤をたたけば、音楽らしきものができることは知っていた。しかし、自分にとって楽譜とはそれだけのもの、まさか、四重奏曲の楽譜を「読む」だけで頭のなかで音楽が鳴り響く人がいるとは、想像すらしていなかったのだ。

そういう人がいることを知ったとき、音楽家というのはじつに偉いものだと感じた。楽譜に書かれてある通りに指を動かせばいいのだったら、音楽はすべてスポーツの一種だ。声帯の運動家を歌手と呼び、指の運動家をピアニストとバイオリニストとか呼んでいることになる。音楽がまったく違うものらしいと思ったはこのときからだ。当然ながら、そう思ったからといって、音楽が「分かる」ようになったわけではない。しかし音楽を聞くのは楽しいし、聞くのなら、自分にはまったく判断がつかないので、音楽をほんとうの意味で理解しているらしい人の意見を参考に、一流といわれている演奏で聞こうと考えている。

たぶん、翻訳についてたいいていの人が考えているのは、これに似ているように思う。楽譜をみればピアノのどの鍵盤を押せばいいかが分かるように、英語の単語をみればどの訳語をあてはめればいいかが分かるかと考えている。そして、楽譜を読んで音楽が頭のなかで鳴り響く人がいるように、原著を読んで物語なり論理なりが頭のなかで形作られる人がいるとは考えてはいない。だから、ピアノの演奏を指の運動の巧拙だけで判断するように、翻訳の善し悪しを考える。

翻訳について考えたり論じたりする際に通常使われる言葉も、大部分はこうした誤解に基づいている。たとえばこういう言葉がある。

「誤訳」という言葉。ピアノの鍵盤を押し間違えたというのと同じだ。英文和訳で減点される部分という意味であり、本来の意味でも翻訳とは無縁の言葉だ。

「意識」という言葉。楽譜通りに弾いてください、勝手に弾かないようにという非難の言葉だ。楽譜通りに弾いても音楽にはならないことを理解していない言葉である。

「直訳」という言葉。これは逆に楽譜通りに弾くという意味だ。音楽の場合なら、コンピューターを使えば楽譜通りの音が鳴る。それが理想だというのなら、CDを買うのはやめて、パソコンで音を鳴らせばいい。翻訳の場合なら、学校で学んだ英和翻訳の公式通りに、辞書に書いてある訳語をそのまま使って訳するのが理想だというのなら、機械翻訳ソフトを使えばいい。

音が並んでも音楽にはならない。言葉が並んでも文章にはならない。文章とは何よりも意味を伝えるものだ。翻訳の場合には原著がある。原著を読んで頭のなかで形作られる物語なり論理なりを、母語で読者に伝えるのが翻訳である。物語や論理を伝えないものは、意味を伝えないものは翻訳ではない。翻訳擬〔もど〕きにすぎない。

---- ちくま学芸文庫 ----		---- ちくま新書 ----	
		320	355
酒井邦秀	快読100万語! ペーパーバックへの道	二木麻里・中山元	山岡洋一
		法書	英単語のあぶない常識 翻名人は訳語をどう決める
		書かれたためのデジタル技	
		二木麻里・中山元	
		大学には合格した。でも英語ができるようにはならなかった。学校英語の害毒を洗い流すための処方箋	はままでに、ohan はしはしは、ほんとうにそうなのか。辞書の訳語の落とし穴をつく。
		辞書はひかない! わかんない語はとばす! インモノの英語が自然に身につく奇跡の実践講座	
1,000円	1,000円	700円	700円
筑摩書房 東京都台東区蔵前2-5-3 サービス・センター 048 (651) 0053 http://www.chikumashobo.co.jp			